

新時代を生きる力を育む知的・発達障害のある子の道徳教育実践

—多様な学びの場（特別支援学校、特別支援学級、通常学級）における「特別の教科 道徳」—

企画・司会者

話題提供者

指定討論者

齋藤 大地（宇都宮大学共同教育学部）

日置健児朗（熊本大学教育学部附属特別支援学校）

宮越 淳（千葉県君津市立南子安小学校）

青木 利樹（東京学芸大学教職大学院）

水内 豊和（富山大学人間発達科学部）

細川かおり（千葉大学教育学部）

KEY WORDS: 道徳教育、知的・発達障害、多様な学びの場

【企画趣旨】（齋藤）

道徳教育においては、主体的な自己とともに、よりよい社会の実現を果たそうとする社会的な存在としての自己の育成が目指される。よりよく生きるための基盤となる道徳性の育成は、知的・発達障害のある子たちが、変化が激しく予想が困難な時代を生きる上で非常に重要な意味を持っている。昨年度のシンポジウムでは中学部の道徳科の実践 3 例を通し、知的障害特別支援学校における道徳教育の授業づくりのポイントや課題について議論を重ねた。今年度のシンポジウムでは、特別支援学級や通常学級を含む多様な場における知的・発達障害のある子の道徳教育のあり方について、授業実践や調査研究を通じ検討する。

【話題提供者の趣旨】

1. 特別支援学校中学部・特別の教科 道徳「“協力”するとどんな気持ちになるのかな？」（日置）

知的障害特別支援学校の中学部の生徒に対し、各教科等の学びの中で経験したことやその時に感じた気持ちなどを関連付けながら、道徳の一斉授業に取り組んだ。生活単元学習「運動会に向けて」の練習や運動会当日を振り返り、「協力」について考えることを学習テーマに設定した。友達と一緒に競技に取り組む時に感じた気持ちについて、互いによく理解し、信頼し、支え合うことで、よりよい関係の在り方を考え、友達の大切さに気付くことができるよう授業内容を設定した。また運動会単元練習時と大会当日、大会終了後の考えや気持ちを比較することで、自分自身の気持ちの変化への気付きを促すことができるようにした。

生徒が話し合い活動を行う時には、本校で培ってきた自立活動における支援方法や教材等を活用した。心理劇の手法を応用し、生徒の内面を教師が代弁したり、翻訳的に気持ちや考えをまとめたりした。生徒自身の気持ちの発現の気付き、思考、表現を促し、生徒が考えを伝える一助となり、生徒同士の共感を促すことができた。自分自身のことを多面的・多角的に捉えて考える経験を通して、実際の経験や感じたこと及び考えたことを基にした道徳的価値の発見、互いの良さを認め合い、思いやりなど道徳科の見方・考え方を育むことを目指した授業実践について報告する。

2. 小学校特別支援学級における道徳科授業の実践（宮越）

小学校の自閉症情緒障害特別支援学級に在籍する 1 年生から 4 年生の児童に対し、小学校 2 年生の教科書の教材を使い、一斉指導の形態で道徳の授業を行った。対象とする児童は自閉的傾向が見られ、コミュニケーション自体に課題があり、児童同士で話し合うことには課題があった。

そこで、教師が設定した意見 A と意見 B を児童が選ぶ「2 つの意見」を用いた指導に着目し、児童が見通しを持つことができ、論点に沿った話し合いができるようにした。また、教師が児童の話し合いを仲介し、児童の意見を他者にわかるよう代弁したり、まとめたりする間接的な話し合いも「議論」と捉えた。児童の意見から、①多角的・多面的に見ること、②自分事として考えること、の 2 つの

観点における変容を評価した。教材や授業の形態は通常学級での授業に近いが、実態や学年に違いのある特別支援学級の児童を対象とした実践を報告する。

3. 小学校通常学級における道徳科での発達障害児への支援（青木）

現在、通常の学級には 6.5% の発達障害児が在籍しているとされている。新しい小学校学習指導要領の各教科には、障害を含む通常の学級の発達障害児への配慮事項の項目が記載されており、「特別の教科 道徳」（道徳科）においても「困難の状態」を把握した上で必要な配慮が行われることとされている。こうした現状から我々は、小学校の通常学級の道徳科で行われている発達障害児への支援について、現状と課題を検討するために、質問紙調査を行った。

対象は、ある市の公立小学校（8 校中 7 校）で道徳科を担当している教員であった。その結果、行われている支援の内容は、その特徴から、[道徳科で特に行われている支援]、[全教科で一律に行われている支援]等の 4 群に分けられた。また、その成果としては、発達障害児の教科書の内容理解の促進や授業への参加態度の変化や、授業のユニバーサル化に関する結果が得られた。一方、課題としては ICT 機器や視覚的な教材などの充実、在籍する学級の雰囲気作りなどが指摘された。調査の結果等を踏まえて、通常学級での道徳科の支援の展望についてまとめたい。

【指定討論の趣旨】

道徳科でよく取り扱う「約束」とはどういうことか？「友達」とはどういうものか？他者との関係性の中に生きる人間社会は、般化可能な知識を修得しつつ、文脈の中で一義的でなく臨機応変にそれを活用することが求められる複雑系である。したがって、単一価値ではなく「多面的・多角的な思考」を促し「心情を育てる」道徳科は、知的障害・発達障害のある子どもにとって容易ではないがとても大切である。実践報告から道徳科のさらなる可能性と有効性につながるヒントを得たい。（水内）

学習指導要領では、主体的・対話的で深い学びを通して、資質・能力の育成が求められており、道徳においても、生徒が自ら考え、議論する道徳が求められている。知的障害の児童生徒にも障害特性を踏まえて、生徒が自ら考えることを通して、気づいていける道徳の授業、道徳的価値を実感をもって感じられる授業、生活の中で活かせる授業が求められる。知的障害の生徒の特性を踏まえた授業の工夫と道徳的価値の生徒の学びについて考えていきたい。（細川）

*本シンポジウムは 2020 年度日本特殊教育学会研究奨励助成事業により実施された。

(SAITO Daichi, HIOKI Kenjiro, MIYAKOSHI Atsushi, AOKI Toshiki, MIZUUCHI Toyokazu, HOSOKAWA Kaori)